

田中つた子

おきうさん
やっばりん
ガンやて

著者略歴

田中つた子（たなかつたこ）

昭和25年鳥取県生まれ。昭和49年姫路市別所の理
髪業田中裕三と結婚。60年10月2日夫死亡。

おとうさんやっぱりガンやて

1986年12月15日 第一刷発行

著 者 田中つた子

発行者 松室智治

発行所 株式会社 三水社

東京都千代田区三崎町 3-2-13

電話／03-237-1277 FAX／03-221-0594

印刷製本 中央精版印刷株式会社

© Tsutako Tanaka 1986 Printed in Japan

ISBN4-915607-18-6 C0095

落丁・乱丁本はお取りかえいたします

おきうさん
やっばり
がんやて

田中つた子

おとうさんやっぱりガンやて！目次

告知のとき	8
入院そして退院	25
“楽しい”暮らし	59
一日だけの家出そして……	77
再発	95
各地での講演	105
土のにおい	126
義母も一緒に	137

ガンと仲よし

148

別所そして東大での講演

162

ホスピスへの入院

174

トラキチ裕さんと木戸選手との約束

180

ウイ・ラブ・裕さん

184

いってらっしゃい、おとうさん

196

あとがきにかえて

題字

西澤
均

おとうさんやっぱりガンやて

告知のとき

私は、決心していた。

夫には真実を話そう。

話すことは決まっていたが、心の動きと感覚がほんの少しずつずれていくような、奇妙な感じがしていた。国道沿いの「理容田中」と書かれた店のドアがひどく大きく見えた。家全体がきき耳をたてているようだった。

ドアを開けると、夫は鏡ごしに私の顔を見た。私の帰りを、全身で待ちうけていた。心配が私に伝わってきた。

「おとうさん、やっぱりガンやて」

自分の声が、思いがけないほど大きく店じゅうにひびいた。夫は何て言うんだろう。どうするんだろう。すべての神経を集中して、夫の顔を見つめていた。

「あ、そうか」

夫は椅子に座ったままうつむいて言った。それだけだった。

私は「あ、そうか」ときいてホッとした。気が抜けて体じゅうが軽くなった。私は夫の横に寄りそうように座った。

夫が体の不調を言い始めたのは、夏の初めから。秋にかけても言いつづけた。なんとなく胃が重くて痛いというのだ。夫は食べるのが大好きで、よく食べていた。

「わしは大食いやな」と、よく言っていたものだ。だからそのときも、ちょっと食べすぎたのだろう、夏の疲れが出たのだろうと、簡単に考え、胃薬を飲む程度であまり心配もしなかった。

しかし、夫の胃の痛みはいっこうにとれず、その様子を見て、だんだん気分が重くなってきた。

夫の父親は、私たちが結婚する五ヶ月前に亡くなっている。ガンだった。夫は、父親が癌で死んだから自分も癌にかかるという恐怖を、ずっと誰かれなしに言い続けていた。父親の末期の苦しみを見ていたから、夫にとって癌イコール死。夫は結婚以来ずっと、その恐怖感を持ち続けていた。

しかし、私は夫の恐怖感を理解できていなかった。周囲に健康な人ばかりいる環境

で育ち、私は病気と病人に対して無知だったから、ガンの恐しさも全然知らずにすごしていた。だから夫の「癌イコール死」「恐怖」というものがわからずにいた。ただ、ガンになってもらっては困る、いやだという意識だけが強くあった。

「親父が癌で死んだからわしも癌にかかる」という夫に、

「なりもしないうちに、そんな心配ばかりしてもしかたないのに」「ガンになったら困る。だからバランスよく食事を作ろう」と思って、「あれ食べたかどうか、これ食べたかどうか」と、食事に対していろいろ気を配っていた。

夫は恐怖を訴えていたのに、私も義母も、そんなことは聞きたくなかったから、夫の言葉をそのまま聞き流していた。

「親父が癌やったからわしも癌にかかる」

と本人だけが不安そうに訴え続け、時だけが過ぎていった。

もし初めから、癌にかかるという言葉をそのとおり受けとめ、聞けていたら、早く検査をすすめたり、夫の健康に注意していれば、夫はガンになどならなかったかもしれない。たとえばガンになっていたとしても、結婚から発病までの八年間、少なくとも夫の中の恐怖感はうすらいでいたかもしれない。夫は毎日をもっと楽しく暮せていたかもしれない。

今になって、私はそう思う。

胃の痛みが続いたとき、夫の中では「癌」という文字が、反対にうすれはじめたのだろうか。病院に検査に行くのも、何やかやと理由をつけてはのばしていた。

「わしは潰瘍かもわからへん。腹がへったらキリキリ痛んで、食ったら治る」

そう言って、よく物を食べ、缶コーヒーやドリンク剤をしょっちゅう飲んでいた。

そして、胸がむかつくと言っては胃薬を飲んだ。それでむかつきが治ると、また安心したように病院にも行かなかった。

食欲も体重も減らず、かえって太ったくらいだった。以前はウエストが七十二cmのズボンをはいていたのにそれがきつくなった。来週こそは七五cmのズボンを買に行かなくてはと、私は思っていた。

そのころ、胃薬もぜんぜん効かなくなってきた、病院に行こうと言いつしたが、それでもやはり、何か飲みたがった。

「そんな冷たいもん、調子が悪いから飲んだらあかん」

と私が言うと、今度は私にかくれて、店の外にある自動販売機でドリンク剤や缶コーヒーを買って飲んでいたようだ。

ある日、ジュースを飲むとすぐ、もどした。

「おかしい」

と夫も言い出し、それでやっと、近所の医者に見てもらいに行った。バリウムをのんでレントゲンをとり、薬をいただいた。そのお医者さんは夫にレントゲン写真と紹介状を手渡し、

「小嶋さんに見てもらいなさい」

とすすめてくださった。

月曜日、早速それを持って夫は小嶋医院に出向いた。

数時間後、帰宅するなり夫は、

「おい、おるか」

と、二階にいる私を大声で呼んだ。

「なによ」

私が下に降りてくると、夫は階段の下に立っていた。義母も夫の声を聞いて部屋から出てきた。

「お前ら腹くくれよ。わしゃアウトや」

「えっ、どういうこと。なんでそんなこと言うの」

「今日、胃カメラをのんだんや、そしたら先生がアレっという表情に変わったんや。だ

からやばいど。それで、金曜日夕方四時までに検査の結果を連絡すると、先生に言われたんや」

と、夫は一気に話した。

検査の結果が出るまでの四日間、夫の神経はビリビリし、ちょっとしたことにものすごく腹をたてて、苛立ちを隠そうとしなかった。義母も子供たちも私も、苛立つ夫に對して、どうしていいかわからずオロオロするのが、また夫の苛立ちをさそった。

夫は近所の八百屋のおっちゃんの所へ行き、

「わしは癌かもわからへん。胃がおかしいんや。癌やったら、おっちゃんたのむわな」

と、たのんだのだそうだ。八百屋のおっちゃんは、

「裕ちゃん、そんな心配せんでもええやないか。あかなんだらあかなんだときのこっちゃ。おまはんとこの嫁はんはしっかりしとるし、店もあるし、心配せんでもええ」

と、夫をばげましてくれた。

そう、おっちゃんから私は後できいた。

ぶっきらぼうだけれど、親切で何かと気にかけてくれる八百屋のおっちゃんだから、夫はたのみに行ったのだらう。いてもたってもいられなかった夫の気持ちを私

は感じる。

テレビや新聞に「癌」の文字があると、夫は敏感に反応し、新聞の死亡欄を見ては、
「きょうも癌で三人死んだる」

などと、わざとのように言ったりしたこともあった。

義母と私は、顔が合えば、夫に聞こえないように、

「どないやろうなあ、おばあさん」

「どないやろうなあ、つたちゃん」

今度は夫と私、

「どない思う、あんたは」

「わかるかい！ そんなことが」

次は三人で、

「どないやろうなあ」

「どない思う」

「知らんわい、わしは！」

子供は、

「お父さん、どないやった」

「……」

田中家の長い長い四日間だった。

五日目の金曜日、結果の出る日、夫は朝から電話に出ようとはしなかった。

リーン。

ビクッ。

義母と私は顔を見合わせてから、義母が電話に出た。

「やれやれ」

しばらく経って、また、リーン。

ビクッ。

私が、

「何やった」

義母が、

「某さん^{ダレダレ}やった」

やがて昼になり、ごはんを三人で食べた。沈黙。

リーン。

ビクッ。